

令和七年六月号

《第百五十号》

しるへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

水無月の祭典・行事案内

【月次祭】 九時半より

五日（木）

二十九日（日）

【夏越大祓】 十五時

三十日（月）



【ひとがたの配布について】

六月四日（日）月次祭から大祓用の「ひとがた」を配布します。氏名と生年月日を記入して、三十日の当日か、事前に社務所に御持参ください。初穂料は一族千円からです。持参された方には茅の輪（小）を授与します。

【昭和天皇御製】（第一二四代）

「水害二首」

荒れし国の人らも今はたのもしく
たちなほらむといそしみてをり
嵐ふきて実らぬ稲穂あはれにて秋の田
見ればうれひ深しも

（昭和二十八年）

【六三回神宮式年遷宮に向けて】

この五月に令和十五年に斎行される伊勢の神宮の「式年遷宮」に向け、一連の儀式である「山口祭」と「木本祭」が厳かに執り行はれました。五月二日の山口祭では用材の伐採と搬出の安全を祈念する祭典が、木本祭では正殿床下の心御柱に用ゐる木の神を祀る夜の祭典がそれぞれ斎行されました。

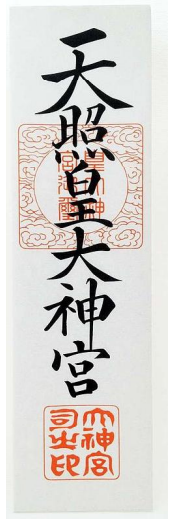
伊勢の神宮は皇室の祖神で日本国民の総氏神でもある天照大御神や、衣食住や全ての産業の守り神とされる豊受大御神をお祀りしてゐます。

式年遷宮は二十年に一度、社殿のみならず神宝など総てを新しく造り直される一大祭事です。この制度は飛鳥時代に天武天皇がお定めになり、次の持統天皇の時に初めて行はれました。千三百年以上の前から繰り返されてゐる長い歴史と伝統を守りつつ、常に新しく再生されることで、永遠に生き続ける正に日本独自の文化が息づくこの一大祭事に当社も微力ながら奉仕したいと切に願つてゐます。

当神社では今年の十一月から神宮大麻（御札）の頒布授与を行ひます。より多くの世帯に神宮の御札がお祀りされることを願つてゐます。



《十一月から頒布》



【推薦図書】

『宮司の経営』

一七八〇円＋税

『ビジネスパーソンに伝えたい神職のわたしが得た仕事の知見』 田川伊吹 廣田神社宮司 著

クロスメディア・パブリッシング発行
『・・・困難が降りかかってきても、常に神様に向き合いご奉仕する姿勢だけは崩しませんでした。すると、結果、よい導きがあり、助けられることがありました。以来、神社のためにいろいろな取り組みや挑戦を続けてきました。宮司が普通の経営者と違う点は、信仰でしょう。信仰という大事なものに気づき、これは会社の経営やビジネスの働くということに通じるのではないかと思うようになりました。だからこそ、このタイミングで一度立ち止まって振り返ることが必要なのではと思ったのがこの本をまとめたきっかけです。うまくいっている今こそ、宮司としての役割を見失わないよう、これからの神社に求められること、自分がやるべきことを改めて、考えてみようと思ったのです。そして、今までの経験のなかで得た知見が、誰かの役に立つのであれば、これほどうれしいことはありません。・・・』（はじめにより）

ビジネスパーソンに伝えたい神職のわたしが得た仕事の知見

宮司の経営

田川伊吹 (Takawa Ibuki)

ジャングルと化した寂れた神社が、なぜ日本中から参拝者が集まる神社へと変わったのか？

当時全国で最も少く苦しい神社に、財政難の神社を立て直した黄色い首の宮司によるビジネスモデル変革と仕事論

6倍!!
15倍!!
36倍!!

丸亀製麺と廣田神社は「働く人の幸せ」起点という共通点がある。

トリドールHD 代表取締役社長 栗田貴也氏推薦

『世界は利権で動いている』

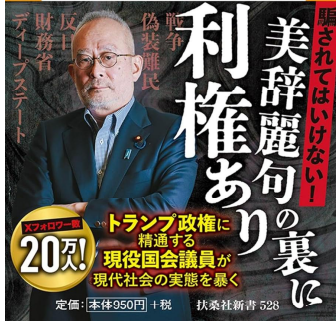
島田洋一 著

九五〇円＋税 扶桑社新書

「・・・本書のタイトル「世界は利権で動いている」は、より正確には「世界はイデオロギー（観念形態）の衣をまとった利権で動いている」と表すべきものである。利権のみを露骨に優先して、主張を打ち出す集団は世論を動かさない。そこで彼らは、美辞麗句に彩られたイデオロギーを高く掲げる。いわゆる地球環境保全、いわゆる財政健全化、いわゆるLGBT（性的少数者）差別の排除・・・。」

世界は利権で動いている

島田洋一
Yoichi Shimada



〔第十五回神社総代会開催〕

去る五月十七日、社務所二階（しろへび会館）にて来賓の森橋宏之崇敬会会長をお迎えし、総代十九名中十四名の出席を得て第十五回総代会が開催されました。平田宮司と森橋会長の挨拶を経て、昨年度の神社祭典行事の報告、そして六年度の決算報告が行われました。責任役員の監査報告への総代全員の承認が行はれ、今年度の神社予算が報告されました。又、今年の正月と四月からの大型連休の参詣状況について、今年の巳年がいかに特別であるかが承知できる感謝の報告がありました。

本居宣長の『直毘霊』を読む（三）

千万づ御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子と坐しまして、御世御世の天皇は、すなはち、天照大御神の御子になも大坐します。故れ、天つ神の御子とも、日の御子とも申し。

天つ神の御心を大御心として、何れも、己命の御心もて賢しだち給はずで、ただ神代の古事のまに、行ひ給ひ治め給ひて、疑ひ思ほすことしある折は、御ト事もて、天つ神の御心を問はして物し給ふ。

【現代語訳】

限りない御代で末の御代まで、天皇といふものは、天照大御神の御子孫としてをられ

て、各御代御代の天皇は、そのまま天照大御神のお子さんでをられるのです。よつて、天上界の神様のお子さんとも、太陽のお子さんとも申しあげてをります。

天の神のみこころを神聖なみこころとして、どんなことについても、御自身のお気持ちを賢そうにお見せにならないで、ただ神代の古伝承の通りにお振舞ひになりお治めになつて、疑はしくお思ひになることがあるときは、占ひによつて神のお気持ちを尋ねになり判断なさる。

本居宣長（もとおりのりなが）の紹介（二）

蒲生氏郷の城址近くには少年時代から住んでゐた家が今も保存され鈴屋遺蹟の名でよく知られてゐます。宣長は書齋を「鈴屋」と呼んでゐました。

木綿商の家に生まれましたが、医者（内科と小児科）となり、医業の傍ら日本の古典や古語の研究に勤しみ多くの著作が今も多くの人に読まれてゐます。鈴と山桜をこよなく愛し、自らの墓を設計し墓の後ろには山桜の絵も描かれてゐます。その墓は山寺の妙楽寺の裏山にあります。（続く）

《宣長自身による墓の絵》

